

巻 頭 言

地球も世界も大きな地殻変動を起こしているようです。各地で大災害が起こり、戦争も止むことを知らず、それでいて不気味な無関心が人々を覆っています。しかし、爛熟の果てに破壊に向かう力の底で、新しい価値が生まれつつあるという予感があります。災害に対する世界規模の援助もそうですが、地域での小さな小さなボランティアの活躍を目にします。諦めてはいけない、と思い直す瞬間です。

北海道医療大学は30周年という節目を、そして看護福祉学部は学部創設11年目を迎えました。卒業生は2000名を超え、全国各地で活躍しています。この11年の間に、大学院研究科ができ、修士課程、博士課程をあわせると、修了生たちは150名を超えています。また学部創設当時、医療福祉学科にあった臨床心理学専攻が心理科学部として独立したために、2005年度からは看護福祉という字義通りの学部になります。いよいよ、卒業生の方々と同じ土俵にあって仕事ができる時期に入ったと思います。看護福祉学部学会の立ち上げは、その第一歩としての意味を持ちます。

看護福祉学部という名称は、看護と福祉の統合を目指して設立された日本で初めての学部です。しかし、両者の基盤は同じであるという認識に立つことはできても、実践の領域では、まだまだそのことが実感されていません。保健医療福祉領域では、多くの職種が協働しているにもかかわらず、それぞれの枠に執着している現象がみられます。制度的にも認識の上でも、あるいは担う役割の上でも、両者には溝があると思います。両者の統合はまだまだ観念の領域に佇んだままです。その意味でも、学問的な研鑽と実践的なチャレンジを積極的に進めていかななくてはなりません。学部学会はなによりも、卒業生と教員が手を携えて、ともにそのことを実現していくための場であると考えます。

小さな研究であつたりささやかな実践であっても、それらをまとめ、報告していくことの地道な積み重ねが、上記のことを実現可能にしていきます。学会誌の発刊は、それらの研究や実践報告を発表し、学会員のディスカッションのための機会を提供するという大きな意味をもちます。小冊子ではありますが、ここに学会誌第1号を発刊できたことは、看護福祉のこれからの学問的、実践的発展の意義ある出発点となるはずです。今後も、この看護福祉学部学会誌が、会員のみなさまの切磋琢磨の跡を刻みつけ、それらをこれからの学問と実践につなげ、また、そこから元気をもらうために活用願えることを期待しています。

学会誌発刊にあたっては、同窓会はじめ、多くの皆様のご支援とご協力をいただきました。この紙面をお借りしまして篤く御礼申し上げます。

2005年3月31日

看護福祉学部学会理事長 阿保 順子